台大日本語文研究第 29 期
2015 年 6 月，頁 127-156
2014-09-30 收稿，2015-03-31 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2015.29.127

關於「咸宜園」中庶民教育形態之探討

林孟蓉*

摘要

近年來，當學者在探討日本近代化的過程時，重新檢視近代以前的階段,對江戶時代重新評價的趨勢強烈可見。學者們積極地從政治、經濟、文化、城市規劃等各種角度來分析江戶時代。其中，作者將視線聚焦於江戶時代的教育，並以探究當時的教育形態為主要的課題。

在本論文中，作者著重於江戶時代屬於庶民教育機構的私塾，特別設定由儒者廣瀨淡窓創辦的咸宜園為研究對象。論文中主要針對以下 4 點做分析: （一）在以往的先行研究中被提出質疑的有關私塾名稱之解釋問題,（二）咸宜園教育的魅力,（三）咸宜園在庶民教育中扮演的角色,（四）在現代，咸宜園所象徵的意義。

透過本論文的分析，作者嘗試提出一個在先行研究中被忽略的觀點，或提出不同於既有研究成果的新見解。此外，在定義咸宜園於江戶時代所扮演的角色之後，確認本論文中未及深入探討的課題，將其做為今後延伸研究的主題。

關鍵詞：江戶時代、庶民教育、私塾、廣瀨淡窓、咸宜園

臺灣大學學術期刊資料庫

* 文化大學日本語文學系助理教授

A Study of Commoners Education in Kangien

Ling, Meng-rong*

Abstract

In recent years, it seems to be a trend for scholars to reevaluate the Edo period while exploring the process of Japan's modernization, and most of the studies are mainly concerned about its politics, economy, culture and urban planning. This paper, however, focuses on the education circumstances of the Edo era.

The research takes Kangien that was founded by Hirose Tanso, a Confucian, as example to study private academy for commoners during the Edo era. It discusses various interpretations of the name of private academy done by other researchers, alongside the charm of Kangien in education. In addition, the role of Kangien in commoners' education and the significance of Kangien in modern society are examined.

Through the analysis, the author proposes a viewpoint that was neglected by previous studies and suggests an insight distinguished from other papers. When the definition and the role of Kangien are fixed, the issues not discussed in this paper are to be further examined in future research projects.

Keywords：Edo Era, Commoners Education, Private Academy, Hirose Tanso, Kangien

臺灣大學學術期刊資料庫

* Assistant Professor, Department of Japanese Language and Literature, Chinese Culture University

咸宜園における庶民教育のあり方についての一考察

林孟蓉*

要旨

近年研究者の間では、日本における近代化のプロセスを考察する際、それ以前の近世を顧み、江戸時代の影響を再評価する傾向が強く見られる。江戸時代を政治、経済、文化、都市計画など様々な視点から検討する動きが活発化されてきたなか、著者は江戸時代の教育に着目し、その形態を究明することを課題としたい。

本稿では、江戸時代における庶民の教育機関である私塾に焦点を絞り、儒者・廣瀬淡窓による咸宜園を研究対象とする。本稿では主に（一）先行研究で疑問視された塾名の解釈問題、（二）咸宜園教育の魅力、（三）庶民教育における咸宜園の役割、（四）今日咸宜園が象徴する意味、以上の四点を中心に分析を試みたい。本稿の分析を通して、先行研究では見落とされた視点、或いは先行研究とは異なる見解を提示しようとする。また、江戸時代における咸宜園の役割を明らかにしたうえで、本稿において検討できなかった課題を確認し、今後の研究課題として展開していきたい。

キーワード：江戸時代、庶民教育、私塾、廣瀬淡窓、咸宜園

臺灣大學學術期刊資料庫

* 文化大學日本語文學系助理教授

咸宜園における庶民教育のあり方についての一考察

林孟蓉

一、はじめに

江戸時代の中期において、藩政改革の一環として、藩校が日本各地で開校されるようになった。藩校は基本的には藩士の子弟に朱子学や剣術を教授するものであるが、一部には医術や西洋技術を講義し、中には庶民も受講できるところもあった。庶民レベルの教育内容は主に僧侶などの知識階級が庶民の子どもを寺院に集めて基本的な読み書きを教えるものであった。江戸時代において、寺子屋・手習塾のほかに、各地で学者たちにより開かれた私塾もまた庶民教育の面において重要な役割を果たした。江戸時代における教育機関の中で、最も自主的に運営され、教師も子弟も比較的自由な教育気風に包まれていたのは私塾であった。特に幕末期の私塾は多くの有能な人材を世に送り出している。これらの私塾が幕末から明治にかけての近代化を支える原動力となったことは確かであろう。

本稿では庶民の教育機関である私塾に着目し、儒学者・廣瀬淡窓によって創立された咸宜園に焦点を当てた。研究方法として、筆者は 2011 年 7 月、2012 年 7 月、2013 年 5 月の三度にわたり大分県日田市においてフィールドワークを行った。これまでの先行研究を踏まえながら、現地で入手した史料及び文献資料を分析し、咸宜園で行われた当時の庶民教育の実態及び今日における咸宜園のあり方を探りたいと思う。

二、庶民の教育状況

本稿ではまず江戸時代における庶民の教育状況を概観する。

（一）寺子屋・手習塾

江戸時代における庶民の基礎教育の学び場としてまず寺子屋・手習塾が挙げられる。基本的な読み・書き・算盤を教えたこのような

臺灣大學學術期刊資料庫

教育機関は、従来「寺子屋」と呼ばれ、学者の間でもその用語が使われてきた[1]。近年、寺子屋は上方に偏って使われた名称であり、学術的な用語として手習塾のほうがより正確に表現している、との見解が通説になりつつある[2]。しかしながら現在において、寺子屋・手習塾、この二つの用語がなお混用されており、或いは「手習塾（寺子屋)」というような表現も見られる[3]。

庶民階級の基礎教育の起源は、古く中世の寺院での教育に遡ることができる。江戸時代に入ってから、町人階級の台頭や商工業の発展などにより、教育への要望がいっそう高まり、江戸・京都・大坂などの都市に寺子屋・手習塾が定着していった。寺子屋・手習塾に通う子どもの就学年齢は特に規定されておらず、早い場合は 5 歳から普通は 7、8 歳で入門し、13、4 歳から 18 歳になる頃まで就学する例が最も多かった。また男女共学の寺子屋・手習塾が多数派であった。入門料と授業料に関しても、定額制ではなく、それぞれ親の社会的地位や経済状況に応じた金額を支払うことが通例とされた。大抵の場合はその師匠に相応しい額を近所から聞き出し、入門者の親が判断していたようだ。

教育内容としては、読み・書き・算盤を教えたほか、地理・人名・手紙の書き方など実生活に必要な教育も総合的に行われていた。指導方法については、児童の年齢や社会身分が異なるゆえ、現代教育のような一斉教育はできないので、個別に指導をし、親の職業に合わせた教科書を使い、職業に必要な用語を覚えさせた。寺子屋・手習塾で教育を受けた子どもたちの殆どは、卒業すると職人の親方に弟子入りしたり、或いは商家に奉公したりした。

(二)郷学

郷学と呼ばれたものの中には性質が異なる二種類のものがある。

---

[1] 例えば、石川謙『寺子屋』(東方書院、1935 年)『日本庶民教育史』(玉川大学出版部、1972 年)、奥田真丈監修『教科教育百年史』(建帛社、1985 年)、梅村佳世『日本近世民衆教育史研究』(梓出版社、1991 年)などがある。

[2] 辻本雅史『「学び」の復権-模倣と習熟』、角川書店、2002 年、p.18

[3] 辻本雅史『社会の教育文化史』、放送大学教育振興会、2007 年、p.49
石村華代・軽部勝一郎編『教育の歴史と思想』、ミネルヴァ書房、2013 年、p.147

臺灣大學學術期刊資料庫

一つは藩が家来たちの学問武芸を磨くために、領地内に建てた学問所に相当するものに郷学の名が付けられたものである。いわば藩校の分校のような教育機関である。もう一つは藩が領地内の庶民を教育するために設立したり、或いは設立を補助したり、奨励したりした教育機関である。

郷学は藩の干渉や援助を受ける点においては藩校とその性質が同じであるが、庶民の教化を目的とし、庶民の経済的支持によって支えられることにおいては寺子屋・手習塾と共通する。したがって、郷学の教育機関としての位置は藩校と寺子屋・手習塾の中間にあったと言えよう。郷学の運営形態としては、藩が主導するものから、藩と庶民が協力して設立したもの、民間の有志者のみの手によるものなど様々である。藩が自ら学校を建て庶民教育に力を注いだのは、岡山藩の閑谷学校が最初の例である。各藩が本格的に庶民教育に着目し、学校を建設するようになったのは 19 世紀に入ってからである。また、郷学の分布から見れば、江戸末期において、江戸を中心とする関東地方と、近畿及びその西の地方に郷学が普及していたことが分かる。

（三）私塾

藩校が武士の子弟を教育し、寺子屋・手習塾が庶民を対象とし、私塾がその中間にあって武士も庶民も教えたというのが最も一般的な捉え方である。私塾は幕府や藩が設置した教育機関とは異なり、決められた枠にはまることなく、各々塾主の個性とそこに入門する有志者の自発性を基盤として発展した教育機関である。私塾で教えられていた学科を中心に、漢学塾・国学塾・洋学塾に分類される。江戸時代の数多くの私塾の中で、藤樹書院、松下村塾、適塾等が広く世に知られている。さらに幕末期になると漢学・国学塾以外に、蘭学塾、兵学塾、医学塾など多種多様な私塾も見られるようになった。江戸全期における私塾の数は合計一千校以上を数える[4]。塾として教育を行った期間はそれほど長くないが、寺子屋・手習塾や郷学

[4] 海原徹『近世私塾の研究』、思文閣 、1983 年、 p.24

臺灣大學學術期刊資料庫

と同じように後代に大きな影響を残したことは確かである。

以上、江戸時代における庶民の教育状況を概観してきたが、ここで当時の教育機関数について触れてみたい。【表 1】は江戸時代から明治 5 年までの教育機関の開設状況についての調査である。

【表 1】明治 5 年までの教育機関の開設状況

教育機関	合計
藩校	270
武士教育機関としての郷学	69
庶民教育機関としての郷学	522
私塾	1,276
寺子屋	11,299

（出所：石川謙『日本庶民教育史』162 頁）

この表から読み取れるように、武士の教育機関が 339 校であったのに対し、庶民の教育機関は 13,097 校も存在した。このことは庶民階級が如何に知識の探求に情熱を注いだかを裏付ける。ドーアは『江戸時代の教育』において、「1868 年明治新政府が政権を握り、上からの近代化政策にとりかかったとき、普遍的な初等教育の創設を命じるその布告には既に実質的な基礎が用意されていた」[5]と、江戸時代の教育を高く評価している。

これまで述べてきたように、寺子屋・手習塾、郷学及び私塾は庶民の教育機関として江戸時代半ばから幕末にかけて、当時の教育の一翼を担った。そして、武士階級以外の民衆に教育の機会を提供するという意味において、三者とも同じ役割を果たしたと言えよう。最後にここで三者の相違点について簡単に触れたい。

寺子屋・手習塾は学問の基礎を教える場であり、その教育内容は初等教育に当たるものであった。郷学の場合は、寺子屋・手習塾の

[5] ロナルド・ドーア『江戸時代の教育』、岩波書店、1996 年、p.27

臺灣大學學術期刊資料庫

教育とほぼ同じような手習所も存在すれば、藩校の教育に類似する士庶共学の場としてのものある。一方、私塾は基礎教育を終えた者を対象とする中等教育機関であり、中には藩校を越える高等専門教育機関として機能した塾もあった。例えばドイツ人医師・シーボルトが主催する鳴滝塾がその代表である。このように、寺子屋・手習塾、郷学、私塾ともにそれぞれ特徴があり、庶民階級は個々人のニーズに応じていずれかを選択し、自由に学べるシステムが近代以前の江戸時代にすでに確立されていたことは当時の教育形態の多様性を物語っている。その中でも、私塾は他の教育機関に比べ、「自由な気風を持ち、理想とする教育を行う余地があった」[6]と評価される。加えて、江戸時代の識字率や教育レベルは世界的に見ても一、二位を争う高水準に達していたが、そこに私塾が果たした役割を決して看過することはできない。またその内実を究明することは今日においてもなお重要な意味をもつと確信する。

本稿は江戸時代に数千はあったと推定される私塾の中でとりわけ咸宜園に注目したのは以下の理由がある。まず一つ目に咸宜園はその存続期間、門下生の数という視点からして、江戸全期のすべての教育機関においても稀にみない規模を有するからである。二つ目は咸宜園の創立者である広瀬淡窓は、日記類をはじめ、膨大な数の著作を残しているため、研究の手がかりとしての史料を十分に提供できると思われるからである。本稿は史料に基づき、従来の先行研究において見落とされた見解を見出し、咸宜園教育の特徴をより明確に浮き彫りさせたい。

三、先行研究の分析

本稿は次に咸宜園に関連する先行研究の流れを把握したい。1980年代までに乙竹岩造、石川謙、笠井助治、奈良本辰也らの学者によって、日本の近世における教育史や教育機関を中心とした膨大な研

[6] 田中加代『広瀬淡窓の研究』、ぺりかん社、1993年、p.414

臺灣大學學術期刊資料庫

究成果が残されている[7]。これらの著書の中で、幕府直轄の昌平坂学問所、各藩の藩校ないし民間の寺子屋や石門心学による心学講舎などについては細密に調査・分析がなされてきた。しかし、それまで「私塾をメイン・テーマにする学術書は皆無に近く、主要論文もわずかに数編を数えるのみ」[8]と、海原徹が指摘しているように私塾に関する研究は殆どなされていなかったが、1982 年、アメリカの教育学者リチャード・ルビンジャーは、日本の教育史研究の未開拓地とされる私塾に着眼し、私塾という教育機関の全体像を捉え、その研究成果を『私塾－近代日本を拓いたプライベート・アカデミー』にまとめた。その著書の中で、「封建的秩序へのゆさぶり」と題して、咸宜園を取り上げた[9]。そのほかに、海原徹は 1983 年に出版された『近世私塾の研究』において、咸宜園の教育を「能力主義の先駆」と定義し、咸宜園の就学状況や教育システムを分析した[10]。

この 2 冊の大著が世に出た 1980 年代以前は、廣瀬淡窓或いは咸宜園に関連する研究は『咸宜園教育研究センター研究紀要』において 60 以上の論文が確認できるが、80 年代に入ってからは、発表された研究論文の数が飛躍的な伸びを見せ、80 年代に 39 本、90 年代に 49 本、そして 2000 年から今日まで 58 本の文献を数えることができる[11]。その中で田中加代著の『広瀬淡窓の研究』、また日田市教育委員会による『廣瀬淡窓の生家－廣瀬家の歴史と業績－』は、先行研究の流れを年代別に分析しており[12]、筆者はそれを踏まえて、以下に先行

---

[7] 例えば、乙竹岩造著『日本庶民教育史』（目黒書店、1929 年）、『日本教育史の研究』（目黒書店、1935 年）、石川謙著『日本庶民教育史』（刀江書院、1929 年）、『日本近世教育史』（中文館書店、1931 年）、『学校の発達』（岩崎書店、1953 年）、『日本学校史の研究』（小学館、1960 年）、『寺子屋』（至文堂、1966-1968 年）、笠井助治著『近世藩校の総合的研究』（吉川弘文館、1960 年）、奈良本辰也著『日本の私塾』（淡交社、1969 年）、『日本の藩校』（淡交社、1970 年）などが世に問われている。

[8] リチャード・ルビンジャー『私塾―近代日本を拓いたプライベート・アカデミー』、サイマル出版、1982 年、訳者まえがき p.8

[9] ルビンジャー『私塾―近代日本を拓いたプライベート・アカデミー』、pp.53-88

[10] 海原『近世私塾の研究』、pp.51-118

[11] 『咸宜園研究教育センター研究紀要』（第 1 号～第 3 号）に掲載される「咸宜園参考文献」より統計した。

[12] 田中『広瀬淡窓の研究』、pp.29-37、日田市教育委員会『廣瀬淡窓の生家－廣瀬家の歴史と業績－』、2012 年、pp.92-93

臺灣大學學術期刊資料庫

研究の特徴をまとめてみたい。

まず、研究対象から見てみると、廣瀬淡窓（その生涯、人物像、著作)、咸宜園の教育システム、門下生の分析、咸宜園史跡の研究のおよそ四つに分類することができる。そして、研究の流れからすると、最初は淡窓の思想から出発し、その著書、学校論、門下生の状況へと視点が移り、近年に入ってからは史跡を含めた地域研究、また外国の視点から或いは外国との関連性に重点を置く研究が増えてきている。平成 23（2011）年度咸宜園教育顕彰事業の学術研究部門において優秀賞を受賞した川邉雄大による「明治期における東本願寺の清国布教について」[13]は、咸宜園出身の真宗僧が海外の布教に果たした役割を分析したものであり、そうした新たな視点が評価されたものである。ここで最後に付記しておきたいのは、海原徹は『近世私塾の研究』において、咸宜園は政治的色彩が薄い視点からその教育成果を酷評したが[14]、『広瀬淡窓と咸宜園』において改めて咸宜園の教育にスポットを当て、再評価を行った[15]。

上述した学者個々の研究のほかに、廣瀬淡窓についての研究活動を主旨に設立された「淡窓会」及び「淡窓研究会」がある。この二つの研究会については、公開された関連資料が少ないため、咸宜園教育研究センターの職員より直接提供を受けた情報をもとに、ここで簡単に紹介する。「淡窓会」は地元日田市の学校の退職教師などを中心として構成された廣瀬淡窓の顕彰会である。これまでに日田市内の淡窓ゆかりの地に淡窓の漢詩の詩碑を建立したり、『敬天』という会報誌を毎年刊行していた。しかし、会員の高齢化などから、活動内容が新たに検討され、近年淡窓の命日である 11 月 1 日に淡窓祭を行うなど淡窓の遺徳を顕彰する活動を中心に行っているのみで、本格的な研究活動はしていない。

一方、「淡窓研究会」は先代の廣瀬家第 10 世正雄氏のころから継

[13] 川邉雄大「明治期における東本願寺の清国布教については」、『咸宜園教育研究センター研究紀要』第 2 号、日田市教育委員会、2013 年 pp.1-36
[14] 海原『近世私塾の研究』、p.75
[15] 海原徹『広瀬淡窓と咸宜園』、ミネルヴァ書房、2008 年

臺灣大學學術期刊資料庫

続している研究会であり、現在は第 11 世の貞雄氏を中心として、関東地方に在住の研究者や廣瀬淡窓に興味を持つ人々によって、定期的に研究会や勉強会などが開催されている。例年 6 月第 1 土曜日と 12 月第 1 土曜日に、東京都豊島区にある「謙堂文庫」において、各自の研究テーマについて発表と討論を行っている。この勉強会には咸宜園教育研究センターからも職員が参加している。なお、現在本格的、且つ組織的に淡窓研究を進めている咸宜園教育研究センターについて、本稿の後章において紹介する。

四、塾名解釈の問題点

咸宜園は幕府直轄の天領地・日田（現在大分県日田市）に設立された私塾である。「懐旧楼筆記巻二十」において、「文政三年庚辰。余歳三九。咸宜園ニアリテ。業ヲ講ス。」[16]と記されたのは咸宜園の塾名の初出であると思われる。淡窓自身は塾名の命名について説明を行っていないため、その由来が明白に特定できないが、中国の『詩経』によるという見解がほぼ通説になっている。廣瀬八賢顕彰会編『教聖廣瀬淡窓と廣瀬八賢』において、咸宜園の意味は「士農工商僧医等各方面の人に適応した開放無差別の不偏不党的学園を意味し、また学問の機会均等、教育の民主化を表明したもの」と説明されている[17]。

しかし、田中加代は『広瀬淡窓の研究』において、この通説の解釈に疑問を投げかけた。その理由として、「『詩経』のその部分の意味は、決して四民平等を謳った箇所ではない」と指摘し、その正確な意味は「殷の国が天命を受けてそれを守り、有徳の王が代々統治したことはすべてよろしいことであるという、理想の政治の姿を謳ったものである」とした。さらに田中は『詩経』の原文の解釈をもとに、淡窓が「理想の政治が行われた世にあやかって塾の名を定めた」と推測し、「塾の中にそうした理想の世を実現することが目的で

[16] 『増補淡窓先生全集』上巻、「懐旧楼筆記巻二十」p.252
[17] 廣瀬八賢顕彰会編『教聖廣瀬淡窓と廣瀬八賢』、1965 年、p.13

臺灣大學學術期刊資料庫

あった」と論点を展開している[18]。

本稿ではここで問題とされる『詩経』の原文を以下に取り上げる。なお、詩の中にある「武丁孫子、武王靡不勝」の解釈については学者の間で多岐な意見が見られるが[19]、本稿は石川忠久著『新釈漢文大系ー詩経』に依拠し、その現代語訳を一部引用する[20]。

《詩經・商頌・玄鳥篇》

天命玄鳥、降而生商、宅殷土芒芒。古帝命武湯、正域彼四方。方命厥后、奄有九有。商之先后、受命不殆、在武丁孫子。武丁孫子、武王靡不勝。龍旂十乘、大糦是承。邦畿千里、維民所止、肇域彼四海。四海來假、來假祁祁。景員維河、殷受命咸宜、百祿是何。

（天は玄鳥に命じて、地上に降り商の始祖契を生ませ、殷の広大な地に住まわせた。昔天帝は、武勲ある湯王に命じて、中国諸国の国境を確定させ､津々浦々にいたるまで諸国の君を命じ、その地を治めさせ、中国全土九州を領有させた。……王都方千里は、人民の住むところ、四海の境界を確定し、四海から朝貢する者ひきもきらず、東西南北四方すべて河で交通が盛んである。殷は命を受け、すべてが順調で、多くの福禄を授かった。）

この玄鳥篇は殷の王・高宗を祀る祭祀歌謡であると「詩序」に明記されている｡詩の全体は商の由来を叙述し､先祖を追懐したうえ、現在の王を称え、そして子孫の幸福を祭祀を通して祖霊に希求する内容である。確かに『詩経』の文脈から見て、そこにある「咸宜」とは四民平等を意味しない。しかしながら、果たして田中説のように、教育者である淡窓は政治の理想を塾名に託したと断言できようか。田中は自説を立証するため、淡窓の『約言』の一節を引用し、淡窓が中国古代の夏･商･周を理想と考えていたことを強調する[21]。

---

[18] 田中『広瀬淡窓の研究』、pp.44-45

[19] 倪明威「淺談《詩經・商頌・玄鳥篇》一詩」、香港城市大学城市文学、2006年、pp.167-172

[20] 石川忠久『新釈漢文大系第 112 巻-詩経（下）』、明治書院、2000 年、pp.411-412

[21] 田中『広瀬淡窓の研究』、p.45

臺灣大學學術期刊資料庫

だが、筆者が原文を確認したところ、引用文は原文から一部を切り取ったため、解釈に偏りがあることが明らかになった。田中が引用した箇所は以下のようになる。

> 上の下におけるや、頑嚚聾昧の徒ありとも、あえてこれを愛育せずんばあらず。いわく、これ天我に命じこれを教しむなりと。ただそれ天命をもって教を立つれば、君臣和睦し、禍害生ぜず。三代の久しく天下を保つものは、これをもってなり。

実際、この一文の前に、「均之人也。或為王侯、或為臣庶、天所命也」[22]という前置きがあり、その省略された前置きの部分こそ、淡窓の中心思想が隠されているのである。即ち、王侯貴族の身に生まれたのも、臣下庶民の身に生まれたのも、それが天命である。しかし、どのような身分の人間でもすべて「人」なのだと淡窓がいう。そして如何に頑な愚かな人間でも、すべての人を愛しく思い、教育することは上の下に対する責任であり、それもまた天命であると述べられている。また、田中が引用した「三代の久しく天下を保つものは、これをもってなり」は、この一節の結論の部分であり、重要なのはその前の流れであるように思われる。その内容とは、上（君）は下（民）を愛育し、下は上に従うのは天命である。しかし、上は暴君虐政の場合は、下はそれに反抗し、上下が侮り合う関係になり、世の中が大乱の状況に陥ることを免れない。それを避けるには天命に従って教育することが唯一の道であり、そうすることによって、「君臣和睦し、禍害生ぜず」、世の中は三代のように久しく治世を保てるのだ、という論点である。

以上の分析に基づくと、淡窓は三代の政治を理想としたのではなく、平和な治世をもたらす、或いは治世を維持するために行うべき教育のあり方を理想とした。また、その根本をなすのは「均しく人なり」という万民平等の思想であると筆者は考える。淡窓の学校論は主に著書『迂言』に見られるため、ここで『迂言』に収録された

[22] 『増補淡窓先生全集』中巻、「約言」p.16

臺灣大學學術期刊資料庫

「学制」[23]についても検討する。

淡窓は冒頭に「人才ヲ教育スルコト、今時諸侯ノ国ニ於テ、第一ノ要務ナリ。人才ヲ教育スルノ法、学校ニ如クハナシ」と記述し、学校の制度を立て直すために建言する趣旨を明かしている。但し、全文の内容から見て、ここでいう学校は官立の教育機関であるように思われ、即ち「学制」は公教育への提言であると考えられる。そして学校の制度を改めるには中国の『礼記』を手本とすべきと主張し、学校のあるべき姿を論述した。筆者が注目したのは以下の論説である。

> 國君ノ嫡子ヲ学校ニ出シテ、国人ト一同ニモノヲ学ハシメ。尊卑ノ差別ヲセス。群臣諸民ノ子ト打混シテ、只年齢ノ長シタルモノヲ上座ニオクコトナリ。(38 頁)
>
> 又家中ノ子弟出席スルモノハ、家格ニ因リテ、座席ヲ序テ、長幼ヲ論セス。コレソノ大本已ニ違ヒタリ。(38 頁)
>
> 大禄世家ニ尸位素餐ノモノナク、下ニアルノ賢才モ、相応ニ進路ヲ得、且従前ノ弊俗一洗スヘキナリ。(39 頁)

ここに見るように、淡窓の教育思想の中で、「尊卑差別なし」は重要なキーワードであるように思われる。その思想は「学制」全編において随所に綴られている。以上の論点からも咸宜園に入門する際の「三奪の法」を想起できよう。この『迂言』は咸宜園が開塾されて 23 年後、淡窓 59 歳の時に著されたものである。淡窓は私塾である咸宜園で実践した教育の理想、カリキュラムの構成、講義の進行方法などを、官立学校の制度改正に提言したのである。言い換えれば、身分制度が厳しく制限される公教育の場では実現が困難な四民平等の理想を淡窓が自ら主催する私塾において実現させ、さらにその理想を官立の教育機関にも強く推奨した。実際、田中は咸宜園の教育を評価する際に、「一切身分を排する学校教育を行おうとする点で、画期的な議論であった」[24]とも述べている。しかし、興味深い

[23]『増補淡窓先生全集』中巻、「迂言」pp.37-48
[24] 田中『広瀬淡窓の研究』、p.350

臺灣大學學術期刊資料庫

のは、淡窓は生徒に階級を分けるべきではないと主張しながらも、「生員ノ内、諸公子ハ黒衣、大身ノ子弟目見エスミタル者ハ黄衣、其他ハ一切青衣ナリ。故ニ同列ニアリト雖モ身柄ノ貴賤ハ明カナリ」[25]とし、ここからは「官立」への配慮が読み取れる。ちなみに、商家出身の淡窓は天保 11（1842）年、61 歳の時に幕府より永世苗字帯刀を許された。

以上分析してきたように、筆者は廣瀬淡窓が士農工商の身分制により厳しく統制されていた時代に、学習したい人間なら身分を問わず、すべての人が入門して宜しいという意味で「咸宜園」と名付けたという従来の説は適切であると考える。ちなみに、中国語では「老少咸宜」という四字熟語があり、それは老若男女、すべての人間に適用できるということを意味する。理想の治世を塾内に実現する意味で塾名を咸宜園と命名したという田中説は些か『詩経』の原文解釈に拘りすぎたゆえ、その言葉の真意を見逃した恐れがあることをあらためて指摘しておきたい。

五、咸宜園の教育内容

本節では次に廣瀬淡窓の生涯について簡単に述べる[26]。

廣瀬淡窓は天明 2（1782）年に、日田の豆田町にある廣瀬家の五代目三郎右衛門の長男として生まれた。生家は代官所と各藩の間の事務を取り扱う御用達の商家であり、裕福な環境で育てられた。淡窓は 7 歳から父親に習字や『孝経』、『四書』を学び、幼少期から学問を好んでいた。16 歳で福岡にある亀井塾に入門し、名高い儒学者・亀井南冥、昭陽父子に学んだ。しかし体が病弱だったため、僅か 3 年で帰郷し、ついに家業を弟である九兵衛に譲ったのである。淡窓は 24 歳の時に「講学ヲ以テ身ヲ立ツルヲ業トスル」[27]決意し、初めて長福寺学寮を借り、講義を始めた。その後数回所在地を移り、

[25] 『増補淡窓先生全集』中巻、「迂言」p.42
[26] 淡窓の生涯は主に『増補淡窓先生全集』上巻「淡窓先生小傳」、下巻「淡窓先生年譜」及び『教聖廣瀬淡窓と廣瀬八賢』を参考に記述する。
[27] 『増補淡窓先生全集』上巻、「懐旧楼筆記巻十一」p.129

臺灣大學學術期刊資料庫

塾名も「成章舎」、「桂林園」の変更を経て、文化 14（1817）年、即ち淡窓 36 歳の時に「咸宜園」を開塾した[28]。淡窓は生涯病気と闘いながら、安政 3（1856）年 75 歳で逝去するまで、教育者として多くの門下生を育成した。咸宜園は淡窓が亡くなった後も廣瀬家の学者や門人に受け継がれ、明治 30（1897）年まで存続していた。淡窓は『懐旧楼筆記』、『淡窓日記』をはじめ、数多くの著作を残している。淡窓の作品の殆どは日田郡教育会による『増補淡窓全集 上中下巻』[29]に収録されている。これらの史料は今日の淡窓研究に貴重な材料を提供する。次に咸宜園においてどのような教育が行われたのかについて記述する。

先述の如く、淡窓は武士以外の階級に学問の門戸を開くという趣旨で咸宜園を開塾した。子弟の入門に際して、独創の「三奪の法」があると『灯下記聞巻二』に記される[30]。

一に曰く、その父の付くる処の年齢を奪ってこれを少年の下に置き、入門の前後を以て長幼とす。

二に曰く、その師の与うる所の才学を奪って不肖なる者と伍を同じくし、課程の多少を以て優劣とす。

三に曰く、その君の授くる所の階級を奪ってこれを卑賤の中に混じ、月旦の高を以て尊卑とす。

ここに見るように、実際の年齢、入門以前の経歴、生まれつきの階級を一切否定し、入門の時期や入門してからの成績を以って評価する方法は、当時において画期的だったと言えよう。第三条にある「月旦」とは、学業を評価する方法であり、その詳細については後述する。

以上の三奪法のもとに入門した塾生は咸宜園で何を学ぶのか。咸宜園の授業は①課業、②試業、③消権から構成される。課業は素読（漢文をただ読むだけ）、講読（漢文の意味を教えられる）、輪読（同

---

28 長福寺学寮から咸宜園に至るまでの経緯を淡窓は「懐旧楼筆記巻十一」から「巻二十」にかけて（『全集』上巻）記録している。

29 日田郡教育会『増補淡窓全集 上中下巻』、思文閣、1971 年

30 『増補淡窓先生全集』上巻、「灯下記聞巻二」p.14

臺灣大學學術期刊資料庫

級生に順番に読ませる)、輪講（講義を順番にやらせる)、会読（討論式の学習）といった学力に合わせた方式で進行する。ここで読まれる漢文のテキストは、主に『論語』をはじめとする四書五経、『世説新語』、『近思録』などの儒教の経典である。また、淡窓は江戸時代後期の三大詩人と呼ばれるほど漢詩に造詣が深く、その彼が詩文を学課の一つに加えたのである。このことは「日田の歌詠みの許に子弟を託すは無意義」と批判されたが、詩文の特色たる温柔敦厚の教えによって、塾生の美的意識を涵養し、智嚢を啓発しようと、詩文を咸宜園教育の中に取り入れたのである[31]。

試業とは試験のことであり、試験内容は詩会（制限時間内に詩を作る)、文の会（制限時間内に文を作る)、句読切り（制限時間内に漢文に返り点、句読点を付ける)、書会（書道の試験）の 4 種類がある。消権とは、上記の課業及び試業の成績を評定し、それに加えて塾生に個々に面接することによって、最終的に進級の是非を決めるという制度である[32]。そのほかに、塾生全員に塾の職務を分担させる「職任」の制度も設けられた。咸宜園の教育では、学問の伝授のみならず、積極的に塾の運営に参加させることによって、実務の経験を身に付けさせ、将来に備える訓練も着実に行った。

ここで最後に咸宜園には共同生活の規則として、82 条にのぼる「規約」が厳しく制定されていたことを特筆しなければならない。塾生の飲食、外出などを悉く規則によって制約することは、比較的自由度の高い私塾の教育において例を見ない。ここからも咸宜園の教育の姿勢が窺える。

今一度成績表の話に戻るが、月旦評は文化 2（1805）年に、咸宜園の前身である成章舎の時代に作られた制度である[33]。最初は門下生 15 名の学業成績を四等に分けて評価したが、咸宜園の時代になると、評価を更に細かく分類し、最終的に入門したばかりの無級から

[31] 御厨貴監修『歴代総理大臣伝記叢書第 14 巻清浦圭吾』、ゆまに書房、2006 年、p.17
[32] 前掲『教聖廣瀬淡窓と廣瀬八賢』、pp.16-18
[33] 『増補淡窓先生全集』上巻、「懐旧楼筆記巻十一」p.138

臺灣大學學術期刊資料庫

九等までに分けるという制度を定めた。成績発表は毎月 25 日に、全塾生の前で行われ、昇級する者が一人一人師匠の前に呼び出され、昇級を命ぜられる。また、著しく進歩した者には賞詞が与えられる[34]。しかし、淡窓自身は塾生の勉学意欲を引き出すために考案した月旦評のシステムは、必ずしも完璧な制度にあらず、「百事皆得有レハ一失有リ、一利アルハ一害アリ」[35]と自己評価したように、点数主義の欠点を十分に理解していた。それゆえ、度重なる改良を試み、試行錯誤の中でより合理的な評価制度を目指したのである。後年、幕府の郡代を務めた塩谷大四郎に、門人の出身階級を無視した月旦評の改正が求められたほど[36]、この月旦評の制度は身分制を打破し、実力主義を重んずる咸宜園の学風を裏付ける。

六、咸宜園教育の魅力

咸宜園で学んだ塾生の数については、先行研究により差があるが、日田市教育委員会の最新統計によると、咸宜園の門下生は全期にわたって 4900 名を超えていたとされる[37]。咸宜園の所在地である日田は天領の地であり、人の往来も経済活動も盛んであった。しかしながら、交通手段が不便であった江戸時代において、都会の私塾とは別に、咸宜園は地理的に日田の山奥にありながら、ほぼ全国から絶えず弟子が入門してきたのは何故か。明治 41（1908）年、『大阪朝日新聞』に 47 回にわたり連載された「亀門の二廣」というコラムにおいて、新聞記者である西村天因が咸宜園の魅力について所見を述べている。この記事は亀井塾で学んだ廣瀬淡窓及び廣瀬旭荘にスポットを当てた意味で「亀門の二廣」というタイトルが付けられたと思われる。100 年以上前に掲載されたこの記事は咸宜園研究の緒を切ったものと評価されるべきであるにもかかわらず、その全編が完

[34] 後藤三郎・柳町達也校註『細井平洲・廣瀬淡窓集』、玉川大学出版部、1966 年 、p.216
[35] 『増補淡窓先生全集』上巻、「懐旧楼筆記巻十一」p.138
[36] 井上義巳『広瀬淡窓』、吉川弘文館、1987 年、p.75
[37] 前掲『廣瀬淡窓の生家－廣瀬家の歴史と業績－』、p.85

臺灣大學學術期刊資料庫

全なる状態で公表されていないため、学者の間でも入手困難な資料とされる。近年、咸宜園教育研究センターの職員が廣瀬資料館において調査を行った際、「亀門の二廣」のスクラップを発見したことから、全編の内容を当センター研究紀要に見ることができるようになった[38]。

本稿では次に、この貴重な資料をもとに、咸宜園教育の魅力を探りたい。「亀門の二廣」においては咸宜園が長年隆盛を維持できた原因が分析されている。それをまとめると、およそ以下の 6 点になる。

まず第 1 点目は、序論において寛政異学の禁が出され、朱子学が官学となったことから、

> 各藩の師儒は皆拘々たる曲謹の士にして、器に随い材を成す所以を知らず、奇才偉器其の範に就くを屑しとせざる者は、猶遠く良師を求めざるを得ず、況や僧・医・庶人の子弟をや、階級の弊を避けて、皆私学に趨かざる者なし、是私学の盛なりし所以なり（57 頁）

と、私学の隆盛は官学の限界性に関連することが指摘されている。淡窓が僧・医・庶人の子弟を差別なく受け入れることは、正しく咸宜園の最初の魅力であると考えられる。そして、その塾生の受け入れ方は、塾名に掲げられる「咸宜」という淡窓の教育理念の実践でもあることが再確認できよう。

第 2 点目は、咸宜園で行われた詩文教育が塾生に学習の魅力を感じさせたと著者は述べている。

> 詩は人心に入れ易く、初学の徒の才を試み誉れを馳せ易くより、詩を以て教を立てし咸宜園の名最も顕れて…（57 頁）
>
> 淡窓の教育は詩を主とせし…各科の試業中にも、詩は諸生の尤も楽しむ所、亦尤も力を用いし所なり（65 頁）

この点に関して言えば、漢詩に優れる淡窓であるゆえ実現できた教授法であろう。第 3 点目として、月旦表、試験法などといった咸

[38] 溝田直己「資料紹介-西村天因著「亀門の二廣」、『咸宜園教育研究センター研究紀要』第 3 号、日田市教育委員会、2014 年、pp.51-78

臺灣大學學術期刊資料庫

宜園独特の評価制度が挙げられる。

> 淡窓先輩の間に堀起して、儒を以て身を立つるの難きを知り、如何にしてか能く子弟を引くを得んと苦心せし末に、月旦なる一法を案出（64 頁）
>
> 昔時の漢学塾は席順を以て競争せしむる者なきにあらざりしも、学級及び試験制の密にして且備われる宜園の如き者あるを聞かず（64 頁）

第 4 点目として、咸宜園の塾生全員に塾の職務を分担させる「職任」の制度が門人に新鮮感を与えたと述べられている。

> 今や宜園の盛んなる、他塾に跳躍することが如くなりしは、独り当時文運の旺なるに因るのみならず、淡窓の詩を以て標榜せしと、其の塾政整頓、人気に投合する者ありしとは、亦その主因なりけん（64 頁）

第 5 点目として、淡窓が生徒募集の奇策を考案し、採用したことに効果があったと分析している。

> 塾生にして新入生を紹介せし者には、手数料として五点を与え、以て試験点数の不足に備えしめしより、塾生争うて朋友を招致し、且つ能く新入生の世話を為せりという、此は塾生招致の妙策（65 頁）

この点について、西村は淡窓を「学問の教授よりも、教育行政に長じたりしなり」と評価する。豪商の家系に生まれた淡窓の経営の才能はここにおいて発揮されたと言えよう。

そして、最後の 6 点目として、師匠である淡窓の人柄が挙げられている。

> 教育の術ありて、文学徳行、人の師表たるに足らずんば、其の盛を持すること、数十年の久しきに至る能わず、是れ淡窓の大家たる所以なり（57 頁）
>
> 門下の諸生に対しても、決して姓字を呼捨にせず、必ず名の下に子の字をつけて呼ぶを常としけり、其の温厚恭謙は、人の師表と為るに余あり、従游の盛んなるを致せしも亦理にこそ

臺灣大學學術期刊資料庫

（65 頁）

以上、咸宜園研究の先駆と見なされる西村天因の見解をまとめてみた。近年、咸宜園に関する研究活動が盛んに行われていることは先述した如くである。ここでいま一つ近年の評価を紹介したい。

『咸宜園教育研究センター研究紀要』の創刊号において、別府大学名誉教授であり、咸宜園教育研究センター名誉館長を務める後藤宗俊は、既往の研究成果を踏まえて咸宜園の特色を以下のように整理している[39]。

①「三奪の法」と「月旦評」に象徴される平等主義と実力主義の教育。

②「遊山」「放学」に見られる日田の自然と旧跡に遊び、詠み、学ぶ教育。

③「咸宜園」と日田の町の共生―多くの留学生が学ぶ「学園」都市の形成。

④そして何より知性（学問）と感性と情愛と・三位一体の人としての淡窓の人間像。

ここから分かるように、淡窓が独創した教育法及びその人柄を特色に挙げた点において、西村の知見と共通する。但し、咸宜園の教育を地元の自然と結びつけたことは、教育と地域の関連性に着眼する近年の研究の流れであると理解してよかろう。

以上の先達の見解をまとめると、当時の門人は入門資格の制限（＝時代状況）を打ち破った私塾・咸宜園の名を慕って入門し、そこで人間の心を和らぎ、自然と調和した詩情教育、及び現実に対応できる実用的な学問を温厚なる師匠から学び、且つ塾政に携わることが許される学園生活は如何に魅力的だったかが容易に理解できる。江戸時代における咸宜園の教育形態は、少子化の影響で学生募集に悩まされる現在の学校に提言できるものが多いことは、咸宜園の先進性を裏付ける。

---

[39] 後藤宗俊「私塾咸宜園と天領日田の町-その共生の諸相と関連遺産」、『咸宜園教育研究センター研究紀要』 第 1 号、p.3

臺灣大學學術期刊資料庫

七、庶民教育における咸宜園の役割

以上検討してきた咸宜園の教育において、斬新な教育法のほかに、筆者はもう一つの特徴に注目したい。それは、他の私塾に比べて、咸宜園の門下生に政治に携わった人物が少ないことである。咸宜園は緒方洪庵が主催する適塾及び吉田松陰による松下村塾と並んで当時の三大私塾と呼ばれる。適塾の門下生の中には、福沢諭吉をはじめ、大鳥圭介、佐野常民、花房義質など明治期に入ってから教育界や政財界で活躍した人物が多い。松下村塾の場合は、久坂玄瑞、高杉晋作など幕末期における討幕運動の中心人物や、伊藤博文、山縣有朋といった内閣総理大臣経験者を輩出した。一方、咸宜園は閉校されるまでの 80 年余りの間に延べ 5 千人の門下生が学んでいたが、内閣総理大臣になった清浦圭吾、近代陸軍の創立者と呼ばれる大村益次郎以外に、その名が全国に知れ渡った人物は少ない。ちなみに、大村は咸宜園で 3 年ほど在籍した後緒方洪庵に入門し、適塾でも学んでいた。また、清浦圭吾は淡窓の没後に入門した。では、なぜ門下生の数が三大私塾の中で一位を占めるにもかかわらず、有名な政治家などを輩出しなかったのか。それは、咸宜園の所在地が幕府直轄の地であり、商業が盛んなる日田という土地柄に関係すると考えられる。

先述したように、咸宜園の創立者である淡窓自身も商家の出身である。長男として家を継ぐべき立場にあったが、幼少期から病弱だったため、家業を弟に譲り、学問で生計を立てることにした。門人帳から分かるように、門下生は主に日田の町人の子弟であり、私塾で学んだ後も、僧侶、町医者、商家など、それぞれの家業に関わる仕事を続けたものと思われる。また、咸宜園の規定では、入門するに当たり、日田在住の紹介者が必要とされた。本稿は商業の町である日田の土地柄に関連して、入門者の身分別について見てみたい。

井上義巳は『広瀬淡窓』において、咸宜園入門者の出身地、身分

臺灣大學學術期刊資料庫

などについて詳細に分析を行った[40]。その研究成果によると、入門者の身分を武士・僧侶・その他（医家・商家・庄屋の子弟など）の三種類に分けることができる。三者の割合は以下の【表 2】のようになっている。

【表 2】咸宜園門下生の身分別の割合

身分	淡窓時代	青邨時代	林外時代	合計
武士	5.5%	3.3%	10.5%	6.4%
僧侶	33.7%	44.9%	29.1%	33.8%
その他	60.7%	48.7%	60.4%	59.8%

（出所：井上義巳『広瀬淡窓』、217 頁）

この表から理解できるように、武士出身の門下生は極めて少数であり、全体の 6%余りしか占めていない。それとは対照的に、その他に分類される町医者、商家、裕福な農民の子弟などが門人の約 6 割を占めている。この数字からも咸宜園の庶民的な性格が顕著であることが分かる。そもそも入門者の中で、統治者階級の武士が僅かであるゆえ、咸宜園を卒業後、政治に献身する門下生が少なかったことは理解に難くない。また、川邉雄大によると、入門生の 3 割余りを占める僧侶のうち、東本願寺の僧侶が相当数を占めていたことが指摘されている[41]。幕末期、朝廷側に協力する西本願寺とは対照的に、東本願寺が幕府側についたため、維新後、明治新政府との関係は緊迫した。このことからも、主流ではない東本願寺出身の咸宜園卒業者が維新後、政治の中核に起用されるのは容易でなかったと推測できよう。

次に、本稿で特に注目したいことは、咸宜園の名が広く知られるようになり、全国各地から入門した人が、咸宜園で学んだ後、地方へ戻ってから私塾を開いたり、藩校の教授になったりした人が多い

[40] 井上『広瀬淡窓』、pp.202-232
[41]『咸宜園教育研究センター研究紀要』第 2 号、p.3

臺灣大學學術期刊資料庫

ことである。例えば、豊前国・薬師村に生まれた恒遠醒窓は、咸宜園に在塾 5 年後、長崎遊学を経て、帰郷して私塾「自遠館」を開設した。自遠館は後に蔵春園となり、その門下生は明治 11 年に蔵春学校と改称されるまでの約 70 年間に 3 千名を超えたとされる[42]。さらに蔵春園で学んだ鴛海量容が西国東郡草地村に「涵養舎塾」を開いた記録も残されている[43]。また、伊勢国・浄円寺住職の長男として生まれた大賀賢励は、咸宜園を修了して藩校の教授に就任した後、「綴英園半学舎」という私塾を開き、子弟教育に力を注いだ。この綴英園半学舎に入門した門下生の出身地は 22 カ国に及び、門弟の数は千数百人とされる[44]。

そのほかに、地元日田郡の町医者である諫山菽邨は咸宜園を卒業した後、私塾「三隈義校」を開設し、さらに遺児、捨子の救済のために日田豪商の広瀬家、草野家より援助を得て、「養育館」を建設した。なお、この養育館は日本近代における社会福祉施設の発祥とされる[45]。これまで記述した如く、咸宜園の出身者の多くは卒業後、教育事業に携わる事例が明らかになったことで、咸宜園教育の新たな特徴が浮き彫りになったと言える。この特徴もまた、咸宜園が庶民教育の普及において、大きな役割を果たした証拠になるのではないだろうか。

では、何故咸宜園を去った塾生たちは政治の道を選択せず、自ら教育者の道を歩んだのか。その理由として、私塾の指導者である師匠の特質が挙げられる。私塾で勉学する場合は、武士の教育機関の藩校と異なり、入門が義務ではなく、各師匠の人格や学問を慕って入門した人が殆どである。淡窓はその門人たちに儒教の経典を通して、天を敬い、天地自然の法則にしたがって振る舞うという敬天思想を唱えた。彼は 23 歳の時に教育の道を決意して以来、一教育者として自覚し、学問のほかに子弟の人格教育にも力を入れた。淡窓は

[42]『咸宜園教育研究センター研究紀要』第 3 号、pp.79-82
[43]『咸宜園教育研究センター研究紀要』第 3 号、p.79
[44]『咸宜園教育研究センター研究紀要』第 2 号、pp.109-110
[45]『咸宜園教育研究センター研究紀要』第 3 号、pp.87-90

臺灣大學學術期刊資料庫

経世を論じた著作を残しているが、咸宜園が幕府の直轄地にあることから、また咸宜園の運営を支えた生家の廣瀬家が幕府の代官と緊密な関係にあったことからも、淡窓は教育の場面において幕府の情勢についての発言を控えていたと思われる。したがって、適塾、松下村塾に比べ、咸宜園の門下生の中で、熱狂的に政治活動に身を投じ、或いは明治新政府の中心部に入った人物の数は非常に少ないことが理解できよう。そして、それとは対照的に、淡窓の教育思想を受け継ぎ、咸宜園を離れて地元に戻った後、儒学者として学問を伝授する門下生が名を連ねている。本稿ですでに検討したように、理想の世を実現するために万民を平等に教育することが唯一の方法であるという淡窓の思想を今一度想起する必要がある。その思想は教育の道を進む門下生に受け継がれたのである。

海原徹は『近世私塾の研究』において、咸宜園は膨大な門人がいたにもかかわらず、参政した卒業生が少ないことを指摘し、その功罪について以下の結論を下している[46]。

> 学校の秀才は養成されたが、それ以外の何のものも造らなかったというと、いささか酷評にすぎるたろうか。いずれにせよ、咸宜園の教育が、少なくとも政治的人間の育成に大して役立たず、その意味で、同時代にあった時習館や松下村塾などの政治結社的私塾のほとんど対蹠点に位置したことは否定できないところである。

しかし、政治的人間の育成を教育成果の評価基準にすることに筆者は違和感を覚える。繰り返しになるが、もとより咸宜園の教育目的は政治家を育成することにあらず、一般庶民に学問の門戸を開くことにあったのである。これまで分析してきたように、政治の晴れ舞台に立つ門下生が少なかった反面、全国各地で子弟の育成に生涯を捧げた門下生が多かったことは、咸宜園の目指す教育の成果がもっとも効果的に発揮されたことを如実に説明する。そして、咸宜園

[46] 海原『近世私塾の研究』、p.75

臺灣大學學術期刊資料庫

の最大の価値は正にここにあったと言える。言い換えれば、咸宜園は他の私塾に比較して、庶民の教育機関としての性格がより顕著であり、それゆえ咸宜園教育の結果は、数多くの支配階級を輩出したことではなく、広く一般庶民を教育の道に導いたことである。ここからも咸宜園は庶民の教育機関として重要な役割を果たしたと断言できよう。

なお、政治家を多く育成した適塾、松下村塾に比べて、咸宜園の存続期間が遥かに長かったことをここで書き加えておきたい。咸宜園が長続きできたのは、そうした庶民教育の実践を徹底した教育理念が大きな要因となったのではないか。

最後に筆者は淡窓の教育思想の進歩性について以下の 2 点を付記しておきたい。まず一つ目は分科教授の提言である。淡窓の学校論は『迂言』に収録される「学制」に見られることは既述の如くである。淡窓は「学制」の中で、教師が全教科を担当することに限界があると指摘し、それを「今時の学弊」[47]と明言する。したがって各教科を適任する講師に任せる教授法を力説したのである。従来の全科教授の教育方法を批判し、現代においても採用される分科の教授法をいち早く提唱した淡窓思想の先駆性を評価しなければならない。

筆者が注目した二つ目の進歩性は淡窓の実学思想である。「学制」において淡窓は従来の学校の教育内容の弊害について、「有用ノ学務メス」、「学校ノ教モ、形ノミノコトニナリテ、人才ノ生育スルナト、嘗テナキコトナリ」と述べ、授業内容を「無用ヲ去ツテ有用ニ就」[48]くことを提言した。先述した「亀門の二廣」においても「淡窓は常に門生に諭して、学問は己の身の為にするものにて、古人に奉公のために非ずと云い」[49]と、淡窓の実学思想が描かれている。ここにおいて、咸宜園及び他の私塾における、「実学的」対「政治学的」、「アカデミック」な対比が見られる。

47 『増補淡窓先生全集』中巻、「迂言」p.41
48 『増補淡窓先生全集』中巻、「迂言」pp.38-39
49 『咸宜園教育研究センター研究紀要』第 3 号、p.67

臺灣大學學術期刊資料庫

次に明治５（1872）年に刊行された福沢諭吉による『学問のすゝめ』の一節を見てみよう[50]。

> 学問とは、ただむつかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど、世の上に実のなき文学を言うならず……今かかる実なき学問はまず次にして、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。

従来この『学問のすゝめ』に代表される実学主義の思想は、上記の通り天保 11（1840）年に脱稿された淡窓の著書『迂言』にその源流を探ることができる。但し、明治期において提唱される実学は西洋文明を中心とするのに対して、江戸時代において淡窓が言う実学は、漢籍より有用な内容を学ぶといった時代背景による相違性があることに注意しなければらない。

また、『学問のすゝめ』の冒頭に掲げられる「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」というフレーズは、身分制度から解放されて間もない人々に「四民平等」の理念を提唱したものである。淡窓が『約言』において掲げる「均之人也」という概念は根本的に福沢のそれと同じことを意味する。但し、封建時代に生きる淡窓は生まれつきの階級は天命であと認識し、その天命に逆らわないことを前提に、すべての階級の人間を「人」と見なし、その人たちにも教育の機会を与えるべきであると主張した。以上の論点から、福沢諭吉に見る「教育均等」及び「実学」思想は、廣瀬淡窓の著書にその原型を見出すことができたことは本考察を通して確認できた。

八、終わりに

（一）今日における咸宜園が象徴する意味

西村天因による「亀門の二廣」の序論において、咸宜園の盛況は「海外比なしと称せられて、その鼓舞陶鋳の術は維新後学政の典型と為るに至れり、これ豈大教育家に非ず」[51]と高く評価されている。

[50] 福沢諭吉『学問のすゝめ』岩波書店、1993 年版、p.12
[51] 『咸宜園教育研究センター研究紀要』第 3 号、p.57

臺灣大學學術期刊資料庫

咸宜園は文化 14（1817）年に開塾されてから、明治 30（1897）年に閉塾されるまで、約 5 千名の塾生を育成してきた。武士階級を頂点とする江戸の封建時代において、庶民に門戸を開いた咸宜園は、その影響力が甚大であり、近世の庶民の教育機関を代表するものと言っても過言ではない。咸宜園の建造物で現存する遠思楼及び秋風庵は昭和 7（1932）年に「咸宜園跡」として国の史跡に指定された[52]。さらに、平成 22（2010）年に、咸宜園や廣瀬淡窓、門下生などに関する調査研究を行う施設として、咸宜園史跡に隣接する場所で咸宜園教育研究センターが開所された。当センターは研究活動のみならず、子どもや一般市民を対象とするイベントを開催している[53]。また、淡窓の史料や関連図書を多く所蔵する日田市立淡窓図書館も地域住民の生活に活用されている。

近年日本において、近代以前の「学問・教育遺産」を世界遺産に登録しようという動きが非常に活発化してきている。平成 24（2012）年 11 月 18 日、藩校・弘道館、日本最古の学校・足利学校、私塾・咸宜園が所在する茨城県水戸市、栃木県足利市、大分県日田市の 3 市が連携し、「教育遺産世界遺産登録推進協議会」を設立した。その事業内容は「これまでの世界遺産にはない新たな種別の遺産『教育遺産』の概念を提唱し、産・学・官が一体となって、教育遺産の調査研究や普及啓発事業を進めている」[54]と記される。協議会は設立されて以来、毎年国内外から学者や専門家を招き、国際シンポジウムを開催している。

江戸時代におけるこれらの教育機関は、今日の日本における学問・教育の源流と見なされ、日本の近代化の基盤を作り上げたと高く評価されている。その実態をさらに究明し、そのあり方を後世へ伝える意義が十分にあると考えられる。その中でも本稿の研究対象

---

[52] 史跡咸宜園跡公式ホームページ、http://www.city.hita.oita.jp/kangien/

[53] 『咸宜園教育研究センター研究紀要』第 2 号、咸宜園教育研究センター年報、pp.4-8

[54] 教育遺産世界遺産登録推進協議会公式ホームページを参照 http://www.kyouikuisan.jp/

臺灣大學學術期刊資料庫

となる咸宜園は、エリート層を対象にせず、庶民を均等に受け入れ、独自の教育法を展開した教育機関として特筆すべきである。また、咸宜園教育の成果は歴史上においての評価に止まらず、今日においてもなお様々な教育活動を行っていることによって、更なる意味をもつことになろう。

（二）今後の課題

本稿は庶民の教育という観点から、封建制度下の社会の中で、教育機会均等を実現し、実用的な学問を教授する先進性に富む「咸宜園」を分析してきた。塾名の解釈について、海原徹は『広瀬淡窓と咸宜園』において、咸宜園の前身である成章舎、桂林園の名称について説明を試みたが、咸宜園の名称について解釈を行っていない[55]。本稿は咸宜園という名称の出典と思われる中国の『詩経』をもとに、その原文にあたり、塾名を淡窓の政治思想と結びつく田中加代説と異なる見解を展開した。

また、筆者は本稿の分析を通して、咸宜園を大帰（卒業）した門下生は、その後、教育に携わる人が多いことを提起した。そのことは咸宜園の塾生の増加に反映され、咸宜園教育の影響力を広めたことにも重要な働きを果たしたと筆者は考える。特権から排除された庶民階級を育成する意味で、咸宜園は他の私塾に比べてより重要な意味を持つ。それを裏付けるために、より厳密に門下生のその後の動向を調べる必要があると思われる。したがって、咸宜園の門下生で、塾を去った後、教師に従事する状況を把握することは本稿の課題として残された。また、淡窓は開国について比較的に理解を示したが[56]、咸宜園教育は怒涛の時代の変化にどう対処してきたのか、そして閉校に至るまでの経緯についても、今後の課題としたい。

【付記】本稿は 2014 年 5 月 10 に台湾・中国文化大学主催の国際シンポジウムにおける発表原稿を加筆修正したものであり、住友財団

[55] 海原徹『広瀬淡窓と咸宜園』、ミネルヴァ書房、2008 年、p.79、p.87
[56] 『増補淡窓先生全集』中巻、「論語三言解」pp.10-11

臺灣大學學術期刊資料庫

「アジア諸国における日本関連研究助成」（登録番号：118618）の研究成果の一部である。なお、参考資料の収集に当たり、咸宜園教育研究センターの原田弘徳氏よりご協力を賜ったことにここで改めて感謝を申し上げたい。

参考文献

石川謙（1983）『日本近世教育史』、日本学術書院

石村華代・軽部勝一郎編（2013 年）『教育の歴史と思想』、ミネルヴァ書房、

井上義巳（1987）『広瀬淡窓』、 吉川弘文館

海原徹（1983）『近世私塾の研究』、思文閣

（2008）『広瀬淡窓と咸宜園』、ミネルヴァ書房

教育遺産世界遺産推進国際シンポジウム実行委員会（2012）『「近世日本の教育遺産」実施報告書』、教育遺産世界遺産推進協議会

後藤三郎・柳町達也（1966）『細井平洲・廣瀬淡窓集』、玉川大学出版部

高倉芳男（1968）『明治百年記念-咸宜園入門簿抄』、日田市豆田廣瀬宗家発行

田中加代（1993）『広瀬淡窓の研究』、ぺりかん社

辻本雅史（2002）『「学び」の復権-模倣と習熟』、角川書店

中島市三郎（1935）『教聖広瀬淡窓の研究』、第一出版協会

（1942）『咸宜園と日本文化』、第一出版協会

日田郡教育委員会（1971）『増補廣瀬淡窓全集　上中下巻』、思文閣

日田市教育委員会

（2012）『廣瀬淡窓の生家－廣瀬家の歴史と業績－』

『咸宜園教育研究センター研究紀要』第 1 号

（2013）『咸宜園教育研究センター研究紀要』第 2 号

『廣瀬淡窓と咸宜園－近世日本の教育遺産として－』

（2014）『咸宜園教育研究センター研究紀要』第 3 号

廣瀬八賢顕彰会（1965）『教聖廣瀬淡窓と廣瀬八賢』

臺灣大學學術期刊資料庫

御厨貴監修（2006）『歴代総理大臣伝記叢書第 14 巻 清浦圭吾』、ゆまに書房

リチャード・ルビンジャー（1982）『私塾―近代日本を拓いたプライベート・アカデミー』、サイマル出版

ロナルド・ドーア（1996）『江戸時代の教育』、岩波書店

臺灣大學學術期刊資料庫